

討論

引続いての討論では、先ず司会の高橋正郎氏より本報告について
のまとめが行われた。高橋氏は、農家と農家以外の事業体に関する
センサス結果概要では、従来の流れからは変わっていないで、高齢
化も進み、賃貸借も進み畜産では大規模経営の増加が顕著であると
いうことを踏まえて、高橋氏自身、今回のセンサスの設計から参加
したことから、今回のセンサスでは日本農業の構造変革の展望があ
る程度出るとはなにかという予想をもっていたが、予想外にそれ
は出てこなかった。この五年間で一層、世代交替が進み、農家数、
農業構造に動きが出ると思われていたが、高齢化の進んでいる西日
本地域でもそれほど大きな動きを示していない。いわゆる高齢者
ターンの多くなり、出る者より入る者が上回っている。特にUター

ン組がふえており構造変革の展望がつかめなかつたという感想を述べられた。この問題とかかわることであるが、討論では三七万戸の土地持ち非農家の性格がとりあげられた。土地持ち非農家は今回のセンサスで参考として、計上されたものではあるが、不在村地主を別として一応調査が行われた。確かに、センサスでは土地を所有しながらも農業経営を行わない者は非農家である。しかし、土地を持つていけば、それは農家ではないか(高橋正郎)。土地持ち非農家三七万戸は、農家が離農した結果とみられ、この性格については興味がある。報告者は答えている。ところで若いうちは兼業に出て離農し、Uターンをして農業を再開するという者はセンサスでは明らかにされるか(長谷川)という問いに対し、これはセンサスでは明らかにしないが、就業動態調査では、はっきりと出ている。この場合でも一たん離村した在农村業者が定年後農業にもどるといふ例が多いのではないかとするとUターンできる条件は何かが問題となる。黒崎氏は、その条件を、ムラを離れていてもムラのつとめをやっている間、ムラにお願いして、しかるべき人に土地を預けるが、イエとしては一戸を構え、ムラのつき合い、おつとめをする。これによってムラいもどることが出来ることを松本周辺の事例を以て説明した。

Uターンと土地持ち非農家とは深い関係に有ると思われるが、今回のセンサスでは高齢専業農家が増加してきている。これは、Uターンの結果であるのか、あるいは後継者が流出した結果であるのか(高山)についてもセンサスでは明らかにしえないし、また年金受給状況も調査されていない。しかし、中核農家、安定兼業農家、高

齢専業農家などに分類して組み替え集計をセンサス担当者としてはやってみよう。また消滅していく農家について、都会の子供に引取られたり、養護老人ホームに入ったりするその消滅の仕方(若林)についてもセンサスでは生産が中心であるために調査はしていないが、そのような後期高齢者の動向を明らかにすることは重要である。その他、センサス個表の利用の仕方、地帯区分の規準(皆川)、農家以外の事業体の概念規定(宮崎)など技術的問題を含めた質問があり、川崎氏より集落調査は六〇年には行われなかったが、集落別に再集計する集落カードは作る予定であること、農業地帯区分別については市町村統計の再集計によって作成可能であることが明らかにされた。

さて農業センサスに対しては、日経新聞の社説などで、農家規定が小さ過ぎることが指摘されている。この点に関して担当者としては、ある意味で正当であるとしながらも、農家を産業として農業を営む者としてみるだけではなく、農村地域住民の動向を広く底辺よりつかむことに意味があり、これを産業政策的に用いようとするれば、それにそって農家分類を行えばよいとする立場であるという説明がなされた。

以上 (文責 高山)